

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

コレージュ・ド・フランス寄託『獻英樓畫叢』稿

NISHINO, Haruo / 西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022578>

コレッジ・ド・フランス寄託 『獻英樓畫叢』稿

西野春雄

1 はじめに

「獻英樓」は徳川御三卿の一つ田安家の文庫名である。田安德川家伝来の資料には、しばしばこの名称を刻んだ蔵書印が見られる。たとえば、350番もの番外曲（廢絶曲）の集大成で、番外曲研究に欠かせない資料である法政大学鴻山文庫蔵『下懸番外謡本（田安本番外謡）』（写本・袋綴小型本・五番綴・70冊）や、同じく法政大学鴻山文庫所蔵にかかる、文化7年（1810）6月徳川一橋家刊の『舞囃謡 附仕舞謡』（美濃本・5冊）、同じく天保12年（1841）3月刊行の『増補 舞囃謡』（美濃本・1冊）などには、「獻英樓図書記」の蔵書印が押されている。

さて、この御文庫の名前を書名とした『獻英樓畫叢』（18～19世紀成立）は、折帖形式の貼り交ぜ帖で、模写図等による一種の博物誌と呼んでいい資料である。そこには、江戸後期、日本近海に出没した外国船やロシア・オランダなどの外国人の様子、火事・地震など天変地異の描写、異聞・風説を伝える高札や瓦版、さまざまな工芸品の模写、草花の写生、珍奇な動物の写生、そしてかなり多くの能装束（前面図・側面図・拡大図）・能面・舞扇・能道具・舞台図、伎楽・舞楽装束・染色図案、有職などを、彩色で精密に模写した大小さまざまな大きさの和紙が貼り付けられている。

ことに、筆者が関心を寄せている能面・能装束に関しては、色彩も美しく忠実に描写された模写図と、図に付された詳しい注記は、江戸時代の能楽史や能装束研究にとって誠に重要な資料であり、その全容解明が待たれるのである。

2 東博本についての研究

この『獻英樓畫叢』は、現在、東京国立博物館に13冊が保管され（以下、東博本と呼ぶ）、ほかにフランスはマルセイユ在住のクレットマン氏所蔵の4冊（以下、クレットマン本と呼ぶ）が確認されている。したがって、現在のところ、『獻英樓畫叢』は合計17冊の存在が判明している。クレットマン本は、近年パリのコレージュ・ド・フランスに寄託された。この情報をいち早く我々に教えてくれたのが、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所の松崎=プチマンジャン碩子所長である。我々は親しく調査し、撮影する日の到来を待ち望んでいた。

クレットマン本がコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所に寄託される以前に、存在すら知られていなかった『獻英樓畫叢』について、能装束関係記事を克明に調査し（クレットマン本は写真によって言及されている）、その調査結果をまとめ、「東京国立博物館保管『獻英樓畫叢』について」と題して、東京国立博物館誌『MUSEUM』第557号（1998.12）に発表されたのが、染織文化史が専門で、当時、同館染織室長であった長崎巖氏である（長崎氏は、現在、共立女子大学教授）。

同氏によれば、ピエール・クレットマン氏の祖父のルイ・クレットマンは、士官教育のためにフランスから日本の陸軍士官学校に派遣された武官で、明治9年（1876）から11年（1878）まで東京に滞在しており、その滞在中に入手したものである。すなわち「ある時期までともにあったこれら二組の『獻英樓畫叢』は、明治9年から11年以前にすでに行き分かれとなり、そのうちの4冊は前期の期間中にルイ・クレットマン氏の所蔵となり、他の13冊は別人の手を経て、明治42年東京帝室博物館の所蔵となったのである。題箋およびその左右の紙箋はクレットマン氏所蔵本と所有者を異にするようになった時期以降に、前所蔵者もしくは東京帝室博物館において貼られたものであることは明らかである」とのことである。

同論文は能装束関係に絞ったものであるが、これを読めば、『獻英樓畫叢』が能楽研究にとって、とくに江戸時代の能装束や能面・能道具研究にとって、有益な資料であることが理解されよう。我々の調査も、この長崎論文に導かれて始まったのである。

3 クレットマン本についての書誌

長崎氏は、クレットマン本については写真によってその概要を記されているが、我々は松崎所長のご高配により、2003年2月と2004年2月、相良・中野・西野の3名が同研究所を訪問して、直接、原本を目にする機会を得た。2004年2月には、天野も加わり、すべてを撮影することができ、調査・研究を開始した。本稿はその中間報告である。

本冊の書誌を略述する。本冊も東博本とほぼ同じ大きさ同じ装丁で、折り本形式である。柿渋を引いた厚紙で作った表紙に白題簽を貼り、書名を墨書する。台紙は浅黄色または白色・茶色で、表紙の余白に貼付した模写図の項目と資料名を直接墨書している。貼り込まれた和紙の余白には、模写した装束・植物・器物などの名称が墨書され、模写した年月日や絵師の名前なども記されている。模写の時期は、文政7年(1824)から文政13年(1830)と、天保3年(1832)から天保10年(1839)に及ぶ。おそらく何年かにわたって模写され、集められたものであろう。

以下、クレットマン本の、a書名(題簽の記述)、b題簽または薄茶色の紙簽に記された巻次、c表紙に記されている模写図の項目、d題簽脇の紙簽に記された番号、e内容、f大きさ、を摘記する(クレットマン1～4の整理番号は、長崎論文に従った)。

クレットマン本1(『獻英樓畫叢』初集三)

- a 「獻英樓畫叢」
- b 「初集三」「三」
- c (表紙)大項目なし(有職関係)(裏表紙)大項目なし(紋様関係)
- d 「たノ三」
- e 有職関係資料。
- f 大きさ縦42.5×横30.3cm

クレットマン本 2 (『獻英樓畫叢續編』三集 三十八)

- a 「獻英樓畫叢續編」
- b 「二」「三集 三十八」
- c (表紙)「写生 草花」(裏表紙) 能装束
- d 「ね二ノ二」
- e 植物・能装束。
- f 大きさ縦43.8×横30.4cm

クレットマン本 3 (『獻英樓畫叢拾遺』四集 二)

- a 「獻英樓畫叢拾遺」
- b 「四集 二」「七十一」
- c (表紙)「外国」(裏表紙)「外国」
- d 「む一ノ二」
- e 外国・異聞・風説。
- f 大きさ縦41.5×横37.0cm

クレットマン本 4 (『獻英樓畫叢拾遺』八集 三)

- a 「獻英樓畫叢拾遺」
- b 「八集 三」「八十四」
- c (表紙) 大項目なし (災異) (裏表紙) 災異
- d 「う二ノ三」
- e 災異 (特に火事)。
- f 大きさ縦43.0×横30.3cm

4 現在確認される『獻英樓畫叢』の概要

クレットマン本は以上の4冊であるが、次に、東博本13冊も含めて、現在確認できる17冊について、その概要を整理しておこう。総括的な概要は長崎論文に示されているが、参考のため、同論文の表1『獻英樓畫叢』概要一覧に拠りつつ、一部を再構成して表示することをお断りする。

整理番号・題箋の記述・題箋または薄茶色の紙箋に記されていた巻次・白色の紙箋に記されている模写図の枚数・現状で収録されている模写図の枚数・表

紙に記されている模写図の項目・現状での模写図の内容、の各項についても、長崎論文に拠っている。

整理番号	題箋の記述	題箋または薄茶色の紙箋に記された巻次	白色の紙箋に記されている複写図の枚数	現状で収録されている複写図の枚数	表紙に記されている模写図の項目	現状での模写図の内容
東博 1	「獻英樓畫叢」	「初集」	「圖画五十三葉」	54枚	(表紙)「管」 (裏表紙)「寶生流扇 觀世 金剛多」 並喜	中啓地紙16枚 中啓16枚 能面1枚 能装束25枚
東博 2	「獻英樓畫叢續編」	「貳集」	「圖画八十八葉」	88枚	(表紙)「器材蒔絵」 (裏表紙)「器材蒔絵」	漆工品86枚 染織模様2枚
東博 3	「獻英樓畫叢殘編」	「三集」	「圖画七十七葉」	77枚	(表紙)「官庫織文」 (裏表紙)「器材蒔絵」	染織模様66枚 動物11枚
東博 4	「獻英樓畫叢拾遺」	「四集」	「圖画七十五葉」	75枚	(表紙)「能装束」 (裏表紙) なし	能装束39枚 染織模様30枚 三番三1枚 漆工品86枚
東博 5	「獻英樓畫叢拾遺」	「五集」	「圖画六十九葉」	69枚	(表紙)「管 能装束」 (裏表紙)「能装束 小道具」	能装束39枚 染織模様30枚 能装束40枚 能小道具29枚
東博 6	「獻英樓畫叢拾遺」	「六集」	「圖画九十六葉」	96枚	(表紙)「能面 写生」 (裏表紙)「能面 写生」	能面55枚 舞楽図4枚 染織模様1枚 歌仙絵36枚
東博 7	「獻英樓畫叢拾遺」	「七集」	「圖画五十四葉」	54枚	(表紙)「能 舞扇」 (裏表紙)「能 舞扇」	中啓地紙40枚 甲冑図14枚
東博 8	「獻英樓畫叢拾遺」	「八集」	「圖画百葉」	100枚	(表紙)「帶 器材」 (裏表紙)「料紙硯 盃御印籠絵形 御打乱箱絵形」	漆工品93枚 染織模様7枚
東博 9	「獻英樓畫叢拾遺」	「九集」	「圖画八十二葉」	82枚	(表紙)「能 能小道具」 (裏表紙) なし	能小道具22枚 織模様60枚
東博10	「獻英樓畫叢拾遺」	「十集」	「圖画六十九葉」	69枚	(表紙)「楽」 (裏表紙)「楽」	舞楽図10枚 伎楽・舞楽面14枚 舞楽用品等5枚 糸雛2枚 東大寺関係5枚 染織模様13枚 その他20枚

整理番号	題箋の記述	題箋または薄茶色の紙箋に記された巻次	白色の紙箋に記されている複写図の枚数	現状で収録されている複写図の枚数	表紙に記されている複写図の項目	現状での複写図の内容
東博11	「獻英樓畫叢拾遺」	「十一集」	「圖画九十貳葉」	92枚	(表紙) 「能舞狂言」 (裏表紙) なし	能・狂言図92枚
東博12	「獻英樓畫叢拾遺」	「十二集」	「圖画九十貳葉」	93枚	(表紙) 「能舞狂言」 (裏表紙) なし	能舞台図1枚 能・狂言図91枚 能面1枚
東博13	「獻英樓畫叢附録」	「十三集」	「圖画八十一葉」	116枚	(表紙)「武備」 (裏表紙) 「江戸雑」 □□火防	犬追物装束雛形96枚 染織模様18枚 その他2枚
クレットマン1	「獻英樓畫叢」	「初集 三」 「三」	「圖画百葉」	100枚	(表紙) 大項目なし (裏表紙) 大項目なし	有職関係 紋様関係
クレットマン2	「獻英樓畫叢續編」	「二」「三集三十八」	「圖画九十貳葉」	92枚	(表紙) 「写生 草花」 (裏表紙) 「能装束」	植物・能装束
クレットマン3	「獻英樓畫叢拾遺」	「四集 二」 「七十一」	「圖画八十貳葉」	82枚	(表紙)「外国」 (裏表紙) 「外国」	外国・異聞・風説
クレットマン4	「獻英樓畫叢拾遺」	「八集 三」 「八十四」	「圖画九十貳葉」	92枚	(表紙) 大項目なし (裏表紙) 「災異」	災異 災異(特に火事)

5 クレットマン本『獻英樓畫叢』の内容

次に、クレットマン本『獻英樓畫叢』の内容を略記したい。東博本には見えない特色として、クレットマン2『獻英樓畫叢拾遺』四集、及びクレットマン4『獻英樓畫叢拾遺』八集に貼り交ぜてある災異や外国や珍奇な動物たちのように、非常に好奇心旺盛な資料収集の精神である。日本近海に現れた外国船の記事や珍しい動物のことやさまざまな風説、あるいは喧嘩と並んで「江戸の花」と言われたおびただしい火事の記事なども見える。複写図ばかりか実際の瓦版もあり、江戸後期の社会情勢が伝わってくる。『獻英樓畫叢』はこうした方面の研究にも有益な資料と思われる。

それにしても、いったいどういう目的で『獻英樓畫叢』がまとめられたのであろうか。内容が多岐にわたるので一概には言えないが、まず「記録性」とい

うことが挙げられるだろう。外国人や天変地異、あるいは足が5本ある馬や大きな鯨といった珍奇な動物などは、ことにこの感が強い。能装束などについても、その製作過程や材質や紋様などに加えて、伝来や使用した役者や催しについても、やはり「記録性」が挙げられよう。

能楽関係資料として有益なのはクレットマン2『獻英樓畫叢續編』三集 三十八である。東博本も含め、模写は、時に前面図、時に背面図、時に部分図を記している。クレットマン2には能装束50枚が収められており、東博本と同様、これらには、それぞれの作品の法量、使用技法、装束の由来や着用者、上演年月日と場所や演目も明記されていることが多く、江戸時代の能楽史の資料としても貴重である。

具体例を一つあげてみよう。長崎論文の表2『獻英樓畫叢續編』所収能装束一覧のうち、作品番号74についてである。作品名称は「段流水杜若花束模様唐織」であるが、つぎのような記述が見られる。

- a. 作品名称 「段流水杜若花束模様唐織」
- b. 表紙または図に記された名称 「不明」
- c. 収録されている図 「部分図（クレットマン2）」
- d. 図の注記 「唐織文政七申年三月公家衆参内ニ付御能之節／□□之形紋織図 裏緋ユルシ／宝生太夫（部分図）
物四〈朱書〉／唐織 文政七申年三月公家衆条向ニ付御能之節 宝生／□□之形織紋図 裏緋ユルシ（部分図の裏面）」
- e. 印の有無 「獻英樓圖書記」
- f. 関連する現存作品 「不明」

これに対し、クレットマン本を実際に調査した結果、図の注記は、長崎論文で□となっている部分も含め、つぎのように読める。

「唐織 文政七申年三月公家衆参向ニ付御能之節／宝生大夫頂戴之形紋織図 裏緋ユルシ（部分図）」

物 四〈朱書〉／唐織 文政七申年三月公家衆參向ニ付御能之節 寶生大夫
頂戴之形織紋図 裏緋ユルシ（部分図の裏面）

享保六年（1721）正月から文久二年（1862）三月までの江戸城内での演能記録を集成した『触流し御能組』全五冊（法政大学鴻山文庫蔵）に拠って確認すると、たしかに文政七申年（1824）三月朔日のこの日「公家衆御馳走御能」（勅使饗応能）が江戸城で催されている。《翁》《嵐山》を観世大夫が、《頼政》を喜多十大夫が、そして《松風》を「見留」の小書（特殊演出）で宝生大夫が勤めているのである。

御中入後は、喜多七大夫が《藤戸》を、祝言《金札》を観世四郎が勤め、ちなみに狂言は、《佐渡狐》を鷺仁右衛門が、《武悪》を鷺権之丞が勤め、《藤戸》の間は「先陣」の語りで鷺幸之助が勤めている。

したがって、クレットマン本の「段流水杜若花束模様唐織」は、この「公家衆御馳走御能」の節に、宝生大夫が拝領した唐織の紋様を模写したものであることが改めて確認できる。このように、その装束が、いつ使用されたか、あるいは、いつ拝領されたものであるか（これらは制作年時を探る手掛かりにもなる）、などを教えてくれるのが『獻英樓畫叢』の能楽関係の模写図と注記なのである。

今は、ただ一例のみを示しただけであるが、かくのごとく『獻英樓畫叢』に貼付されている能装束関係の模写図と注記は、装束の紋様や意匠や制作年などだけでなく、実際の演能に関する情報をも伝えており、能装束の研究ばかりでなく、江戸後期の能楽史研究にとっても有益な資料といえる。

6 おわりに

ところで、一種の博物誌といってもいい、この興味深い『獻英樓畫叢』は、いったい、全体で何冊存在したであろうか。現在、確認される東博本13冊にクレットマン本4冊を加えても17冊しか伝っていないが、もっと多かったと思われる。それは、現存本の題簽に記された書名と数字から推測できる。書名ごとに整理すると、次のごとくである。

	東 博 本	クレットマン本
獻英樓畫叢	初集	初集三
獻英樓畫叢統編	貳集	二 三集 三十八
獻英樓畫叢殘編	三集	
獻英樓畫叢拾遺	四集 五集 六集 七集 八集 九集 十集 十一集 十二集	四集 二七十一 八集 三八十四
獻英樓畫叢附録	十三集	

すでに長崎氏が指摘されているように、「獻英樓畫叢殘編」「獻英樓畫叢附録」が各一冊であるのはそれほど不自然ではないとしても、「獻英樓畫叢拾遺」が11冊を数えるのに対し、「獻英樓畫叢」と「獻英樓畫叢統編」が2冊づつしかないのは、確かに不自然である。題簽に記された記号や数字から類推しても、「獻英樓畫叢」と「獻英樓畫叢統編」の冊数は、「獻英樓畫叢拾遺」と同程度かそれ以上であった可能性が高いと思う。「獻英樓畫叢拾遺」もクレットマン本の数字から推測すると、もっと多く存在していたように推量される。海外の美術館なり博物館なりの、どこかの倉庫に眠っているのではないだろうか。

我々は、まず能楽関係の記事の解明に着手したばかりで、全容の解明には至っていない。海外も含めて、今後の調査・研究に励みたい。

最後に、貴重な資料の調査と写真撮影を許されたコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所、ならびに松崎=プチマンジャン碩子所長のご高配に対し、心から篤く御礼申し上げる次第である。

Extant volumes of *Ken'eirō gasō* in the possession of the Collège de France

NISHINO Haruo

Ken'eirō is the name of the archives of the Tayasu family, one of three branch families of the Tokugawa, Japan's ruling house during the Edo period (1600–1867). *Ken'eirō gasō* ('Illustrated anthology of the Ken'eirō archives') is a collection of mounted illustrations bound together in *orichō* (folding book) format. It embraces a great variety of subjects: the foreign vessels that visited the seas of Japan in the late Edo period; foreign people such as Russians and Dutchmen; upheavals of nature such as fires and earthquakes; original bulletins and broadsheets on popular topics and rumors; various types of arts and crafts; plants; rare animals; etc. Materials in the anthology related to the *nō* theater and other performing arts include: *nō* costumes (depictions from front and side; enlargements); masks; fans; associated tools and apparatus; stages; costumes for *bugaku* dance; dyeing and weaving designs. From annotations and marginalia added to the illustrations, they appear to date from the eighteenth to nineteenth centuries.

At present, there are a total of 17 extant volumes of the *Ken'eirō gasō*: 13 in the collection of the Tokyo National Museum, and 4 in the possession of the Institut des Hautes Études Japonaises of the Collège de France, from the collection of Pierre Kreitmann. We have no clear idea how many volumes the collection originally included; the extant volumes include title labels that indicate that the complete total must have been much larger.

The first introduction to the collection, and the first indication that it included much material of relevance to the study of *nō* costumes, was made by NAGASAKI Iwao in December 1998, in Vol. 557 of the magazine *Museum*. At the time, Nagasaki was head of the *senshoku* (dyeing and weaving) division of Tokyo National Museum, and he is now professor at Kyōritsu Joshi Daigaku

(Kyōritsu Women's University) in Tokyo. Our research on the collection was guided by Nagasaki's article. When Nagasaki published his article, the Kreitmann volumes were still held by Kreitmann at his home in Marseille, and Nagasaki had yet to see them, but they were later deposited with the Institut des Hautes Études Japonaises of the Collège de France. It was the director of the institute, MATSUZAKI Sekiko (a.k.a. Sekiko Matsuzaki-Petitmengin), who promptly alerted us to the move.

In February 2003 and February 2004, we had the opportunity to examine the volumes at close hand, photograph them, and begin a detailed survey of their contents. As Nagasaki noted in his initial article, the Kreitmann volumes were obtained by Pierre Kreitmann's grandfather, Louis Kreitmann (1851–1914), when he was dispatched as an instructor to the Japan Military Academy by the French Government in 1876–78. This paper deals only with the *nō*-related sections of *Ken'eirō gasō*, and should be viewed as an interim report on a continuing survey.

It is composed as follows: 1. Introduction; 2. Research on the volumes in the collection of the Tokyo National Museum; 3. Bibliographical description of the Kreitmann volumes; 4. Outline of the *Ken'eirō gasō* as a whole; 5. Contents of the Kreitmann volumes; and 6. Conclusion.

As a concrete example of research possibilities that the *Ken'eirō gasō* collection presents us with, this paper deals with the illustration of a *karaori* costume in *Ken'eirō gasō zokuhen 3*, namely the *Dan ryūsui kakitsubata hanataba moyō karaori*. A comparison with the contents of the 5-volume collection *Furenagashi onōgumi* (in the Kōzan Bunko collection of the Hosei University Noh Theater Research Institute), which records *nō* programs performed at the Edo Palace between the first month of 1721 and the third month of 1862, has revealed that, as the annotation to the illustration records, it is a copy of the design of a *karaori* costume received by the leading Hōshō-school actor when he performed the *nō* play *Matsukaze* in the special performance style *mitome* at a *kugeshū gochisō nō* performance on the first day

of the third month of 1824.

The *Ken'eirō gasō* volumes record numerous examples of such illustrations, and it is clear that it is an invaluable source not only for surveys on the designs, dates, and provenances of *nō* costumes, but also for many other aspects of the performance of *nō* in the late Edo period.

In conclusion, I would like to sincerely thank NAGASAKI Iwao for his initial introduction to the collection, and the Institut des Hautes Études Japonaises of the Collège de France, and its director, MATSUZAKI Sekiko, for their generous permission to survey and photograph the Kreitmann volumes.